文化

沈黙に向き合う

沖縄戦聞き取り47年

〈55〉

石原　昌家

海南島は、現在「中国のハワイ」（ハワイと同じ北緯20度）といわれ、癒しのリゾート観光地として有名になっているようだ。

高宮城実盛さんと屋良朝松さんの海南島での体験は、現在その地を訪れた人たちには、信じられないだろう。（それは沖縄戦で「受難の島」「悲劇の島」ともいわれた琉球弧の島々にもいえることだが）。

二人から体験を聴きだすにあたり、聴き手の私は感情をしまい込むようにし、二人には虐殺現場にいたときにタイムスリップしてもらい、その時の心根を引き出すことに努めた。前回に引き続き、目をそむけたくなる場面を直視し、戦争になると人間はどれほどおぞましい行動がとれるのか、とくに次世代のひとたちに伝えたいために二人は証言してくれたのだ。

日本軍による中国人虐殺を目撃した状況などについて話す高宮城実盛さん（左）と屋良朝松さん＝1988年、北谷町の上勢頭郷友会事務所（「上勢頭誌」中巻より）

海南島（下）

中国人を次々と斬首

「良民証」不所持をスパイ視

悲鳴も上げず

（以下、日本兵に中国人が首を斬られた瞬間などについての証言を引用）

高宮城　向かい側では、血が飛んでくる恐れがあるので、一方（血が飛んでこない片側）で見ることができるんです。

石原　中国人は、（そのとき）悲鳴をあげるんですか。

高宮城　誰も悲鳴をあげないね。しかし、女がね。こうしてそこに座らされたら、自分で後れ毛をこう持ち上げてね、首をこうして斬らす女もいましたよ。女も混じっていたよ。

屋良　うちは、女がいる時は見ていないですね。

高宮城　男は度胸なかったね。女が度胸は上だった。いざという時は。こうして、後れ毛を持ち上げて、首を長くしてこうして（ひざまずいて）座っているからね。斬りやすいよ。

屋良　昔、首斬りの時、刀に水をかけるでしょう。あれとまったく同じですよ。斬りにくくなると、水を軍刀にかけ、それで斬ってからまた水をかけて、手では全然触れないのです。

高宮城　（斬首される中国人の）人数が多いもんだから、軍属も希望者は軍刀を貸すから斬りなさい、というのでひとり出ていって斬ったけれども、斬り損なってね。こっち（後頭部）から斬ってね。それでも穴に落ちたからね。しかし、まだ死んでいないから兵隊が、上から銃剣でブスブス（刺して、息の根を止めた）。

屋良　兵隊が、君たちは大根も切れないかといいよったよ。

高宮城　また、（座っている）後ろから銃剣で突く（心臓）に剣先が出ているひともおればね。また、こっち（背骨）の骨にあたってね、突き落としておる人もおったけれどもね。二、三間（一間は1・82㍍）離れて勢いをつけて飛んで来て突き刺すから。

屋良　陸戦隊の兵隊がね。僕たちにも斬れ、斬れという。

石原　この場合、（殺される中国人は）みんな目隠しをしてやっているんですか。

高宮城　目隠しはやっています。

石原　ほんとに悲鳴ひとつあげないんですか。

屋良　悲鳴はあげないよ。

石原　覚悟を決めているからですか。

高宮城　しかし、その時は可哀そうという気持ちはなかったですね。戦争だから。

石原　何か動物でも殺すみたいな感じで見ているのですか。みんなは。

屋良　僕は、最初の時に（兵隊が中国人を）連れて（来て）、やれ！といって斬る恰好をするもんだから、もう、怖くなってすぐ逃げました。

高宮城　私は最後まで見た。

屋良　しかし、どうしても一度見ておかないと、と思って、高宮城さんに一緒に行ってくれと頼みこんで、2回目は全部終わりまでみたんですが、最初は見れんかったですよ。2度目は、（兵隊が）十二、三人を斬りましたが、2、3日飯が喉を通らなくて、二度と見る気はしませんでした。戦の時は、人間が変わってしまい、普通ならかわいそうに見えることでもまったく少しも同情しません。それはもう戦のせいだと。

石原　一回ではなくて、何度もそのようなことがあったのですか。

屋良　何回もあったよ。

高宮城　一番多いときが30名あまりで、その後は少人数ずつだった。

石原　いったい、何回ぐらいあったのですか。

屋良　何回もあるでしょう。

高宮城　2、3名、4、5名ずつ（首斬るのは）たくさんあったね。

屋良　こっちに穴掘って、また次はこっちに穴掘ってという具合に。

高宮城　2、3名斬るときは、行ってみなさいと言わなかったからね。かれらの場合は、（中国人）スパイということでした。

屋良　ちょっとしたことでも、簡単に首を斬りましたよ。兵隊は。

沖縄人による殺害

二人の証言を総合すると、日本軍は占領した土地で、日本軍に従順な中国人が住む場所を「平定」地域として、その地の中国人に「良民証」なるものを発行した。海南島でも7名ほどの日本軍兵士のグループがその「良民証」を所持していない中国人を、ただちに「スパイ」として有無を言わさず首斬りしていった。

そして平定された地域の各集落には「村長」がおかれていた。「村長」は、日本軍に従順な「良民証」を所持していない中国人を、日本軍に引き渡していた。「良民証」を持っていたら、仕事も探せるし、大手を振って歩けた。

ところが、「良民証」を所持していても中国人がまったく安全というわけではなかった。日本軍に信頼されていた「村長」の母親が、沖縄人軍属に殺害されるという事件が発生した。屋良さん所属の野砲あがりの班長（沖縄本島中部出身）が中国人の部落に行って飲酒し、酔っ払って帰るときに老女に出会った。屋良さんの推測では、多分、酔っぱらいが怖いから避けようとしたら、殴って殺害した。

高宮城さんはその事件について「海南島民の命は安かったですよ。お婆さんが、（沖縄の）軍属にたんぼに突き飛ばされて、死んでしまったのですが、5円だったかを払ったら、それっきりです」と記憶していた。だが、屋良さんは、軍が30円払ったとその金額の記憶には食い違いがあった。（二人の証言は『上勢頭誌』中巻、507～514㌻に収録した）。次回までは、二人の証言と関連する皇軍の本質にかかわる証言などについて述べる。

（次回は1月後半掲載）